

# エルニーニョ監視速報 (No. 203)

2009 年 7 月の実況と 2009 年 8 月～2010 年 2 月の見通し

- エルニーニョ現象は冬までは持続する可能性が高い。

## 【解説】

### 太平洋

7 月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $+0.9^{\circ}\text{C}$  で、5 月の 5 か月移動平均値は  $+0.3^{\circ}\text{C}$ 、また、南方振動指数は  $+0.2$  だった(図 1、表)。7 月の太平洋赤道域の海面水温は、ほぼ全域で正偏差だった(図 2、図 4)。海洋表層の水温も、太平洋赤道域のほぼ全域で正偏差だった(図 3、図 5)。7 月の太平洋赤道域の大気下層では、西部で西風偏差、中部で東風偏差が見られた(図 7、図 8)。

太平洋赤道域中部では東風偏差によって表層水温の正偏差がやや弱まったが、依然として太平洋赤道域のほぼ全体で暖水の蓄積が見られることから、今後しばらくは東部の海面水温の正偏差が維持されると考えられる。

また、エルニーニョ予測モデルは、エルニーニョ監視海域の海面水温が、予測期間中基準値より高い値で推移すると予測している(図 9)。

以上のことから、エルニーニョ現象は冬までは持続する可能性が高いと考えられる。

西太平洋熱帯域の海面水温は、春以降、概ね基準値に近い値で推移した(図 1)。西太平洋熱帯域の海面水温は、秋には次第に基準値より低くなると予測される(図 10)。

### インド洋

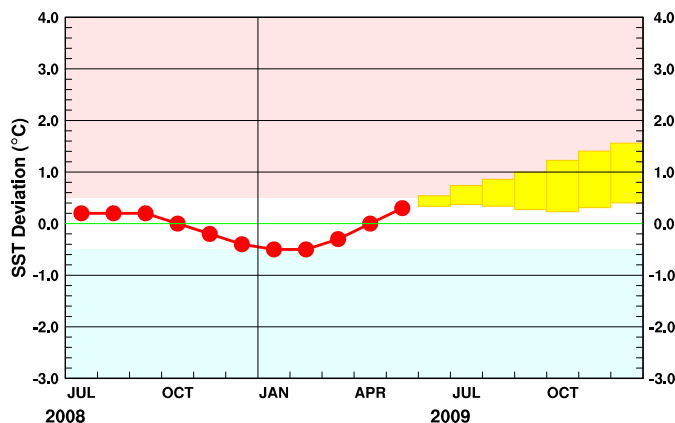
インド洋熱帯域の海面水温は、昨秋以降、概ね基準値に近い値で推移した(図 1)。インド洋熱帯域の海面水温は、今後秋にかけて基準値に近い値で推移すると予測される(図 11)。

### 影響

7 月の日本の天候では、沖縄・奄美を除く各地で多雨、寡照となり、九州南部と関東甲信を除く各地で梅雨明けが平年よりも遅かった。これらの要因の一つとしてエルニーニョ現象の影響が考えられる。

今後の日本の天候については、最新の季節予報を参照されたい。

世界の天候では、南米北部の高温とオーストラリアの少雨が、過去のエルニーニョ現象時の傾向と一致していた。



この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の 5 か月移動平均値の 5 月までの推移(折れ線グラフ)とその後の予測(ボックス)を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が 70%の確率で入る範囲を示す。(基準値はその年の前年までの 30 年間の各月の平均値)

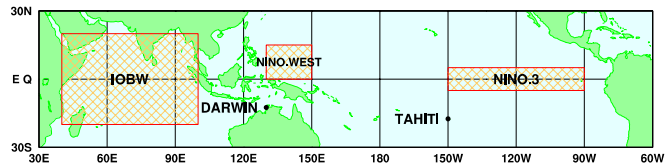
# 【監視・予測資料】

## 2009年7月における赤道域の海洋と大気の状態

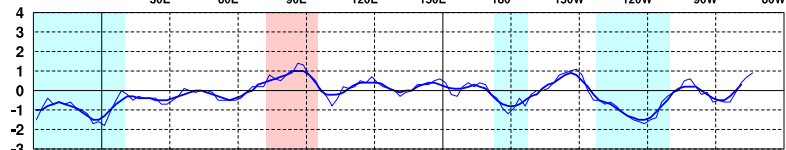
### 1. エルニーニョ監視指数(図1、表)

エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $+0.9^{\circ}\text{C}$

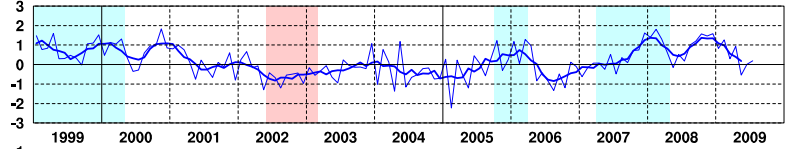
エルニーニョ現象等監視海域  
 NINO.3: エルニーニョ監視海域  
 NINO.WEST: 西太平洋熱帯域  
 IOBW: インド洋熱帯域



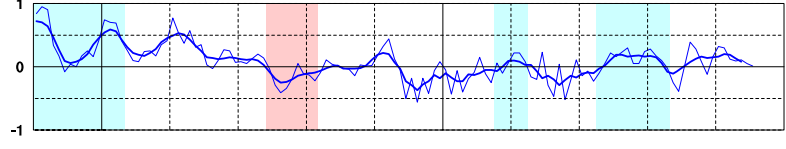
(a) エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値\*との差( $^{\circ}\text{C}$ )



(b) 南方振動指数\*\*



(c) 西太平洋熱帯域の海面水温の基準値\*との差( $^{\circ}\text{C}$ )



(d) インド洋熱帯域の海面水温の基準値\*との差( $^{\circ}\text{C}$ )

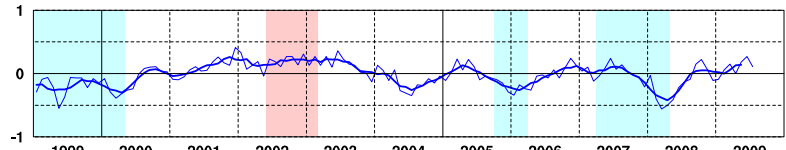


図1 各監視指数の最近10年間の経過

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示す。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

\* 基準値：その年の前年までの30年間の各月の平均値((c)西太平洋熱帯域、(d)インド洋熱帯域では、30年間のトレンドも考慮している)

\*\* 南方振動指数はタヒチとダーウィン(TAHITIとDARWIN; 上図に位置を示した)の地上気圧の差を指数化したもので、貿易風の強さの目安の1つであり、正(負)の値は貿易風が強い(弱い)ことを表している。平年値は1971~2000年の30年平均値。

表 エルニーニョ監視海域の海面水温と南方振動指数の最近1年間の値

5か月移動平均値の 下線部 は  $+0.5^{\circ}\text{C}$  以上となった月を、斜字体は  $-0.5^{\circ}\text{C}$  以下となった月を示す。

海面水温の最新月は速報値である。南方振動指数の!印は速報値であることを示す。

	2008年					2009年						
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
月平均海面水温( $^{\circ}\text{C}$ )	25.6	25.1	24.8	24.9	24.6	25.1	25.8	26.5	27.4	27.5	27.2	26.6
基準値との差( $^{\circ}\text{C}$ )	+0.6	+0.2	-0.2	-0.1	-0.6	-0.5	-0.6	-0.6	-0.1	+0.4	+0.7	+0.9
5か月移動平均( $^{\circ}\text{C}$ )	+0.2	+0.2	0.0	-0.2	-0.4	<u>-0.5</u>	<u>-0.5</u>	-0.3	0.0	+0.3		
南方振動指数	+1.0	+1.2	+1.6	+1.5	+1.6	+0.8	+1.3	+0.3	+0.9	-0.5	0.0	+0.2

## 2. 海洋 ( 図 2 ~ 図 5 )

太平洋赤道域とインド洋赤道域のほぼ全域で海面水温が正偏差

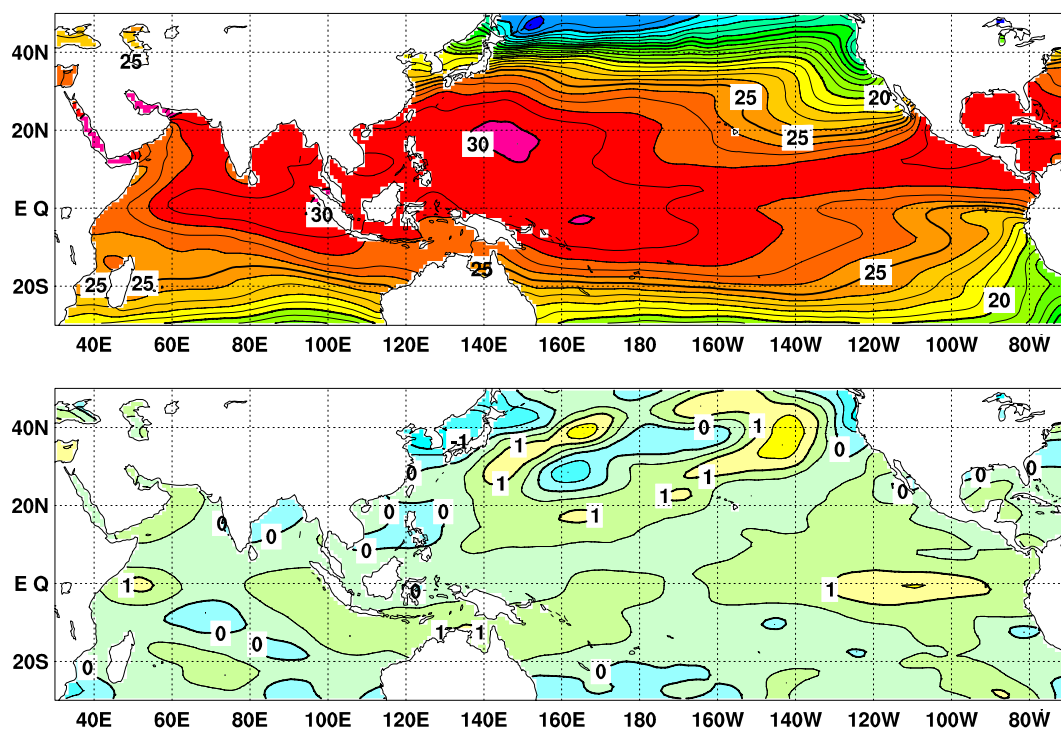


図 2 2009 年 7 月の海面水温図 ( 上 ) 及び 年 平 均 偏 差 図 ( 下 )

海面水温図の太線は 5°C 毎、細線は 1°C 毎の、年 平 均 偏 差 図 の 太 線 は 1°C 毎、細 線 は 0.5°C 毎 の 等 値 線 を 示 す ( 年 平 均 値 は 1971 ~ 2000 年 の 30 年 平 均 値 )

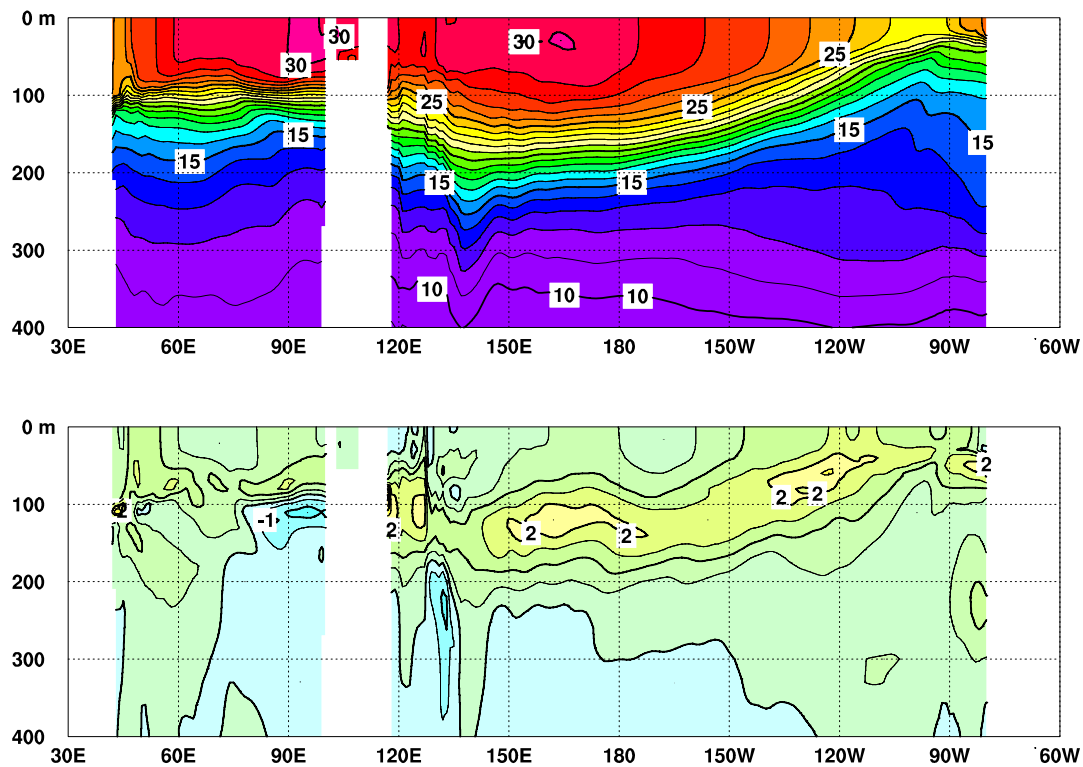


図 3 2009 年 7 月のインド洋から太平洋の赤道に沿った水温 ( 上 ) 及び 年 平 均 偏 差 ( 下 ) の 断 面 図

上 図 は 太 線 が 5°C 毎、細 線 が 1°C 毎 の 等 値 線 を 示 し、下 図 は 太 線 が 1°C、細 線 が 0.5°C 毎 の 等 値 線 を 示 す ( 年 平 均 値 は 1979 ~ 2004 年 の 26 年 平 均 値 )。図 中 白 く 抜 け て い る 部 分 は 陸 地 で あ る。

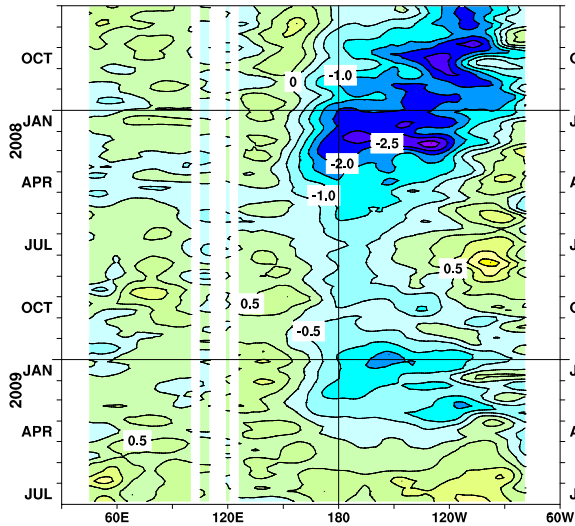


図4 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面水温  
 年偏差の経度-時間断面図

太線は 1°C 毎、細線は 0.5°C 毎の等値線を示す（平  
 年値は 1971～2000 年の 30 年平均値）。図中白く抜け  
 ている部分は陸地である。

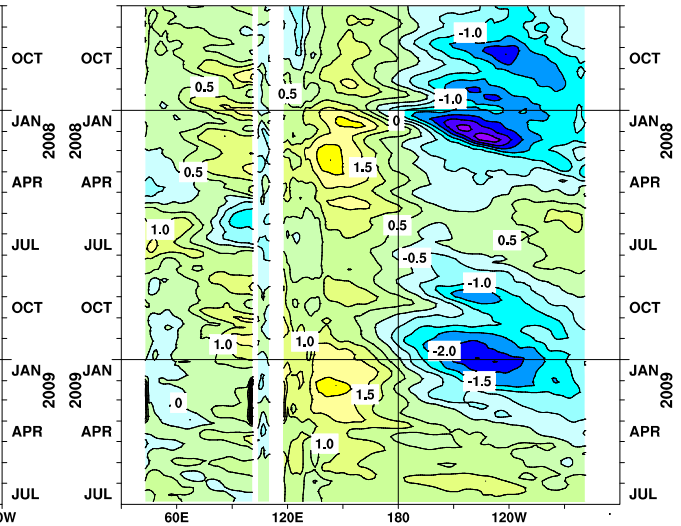


図5 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面から深  
 度 300m までの平均水温年偏差の経度-時間断面図

太線は 1°C 毎、細線は 0.5°C 毎の等値線を示す（平  
 年値は 1979～2004 年の 26 年平均値）。図中白く抜け  
 ている部分は陸地である。

### 3. 大気 (図6～図8)

太平洋赤道域の下層では西部で西風偏差、中部で東風偏差

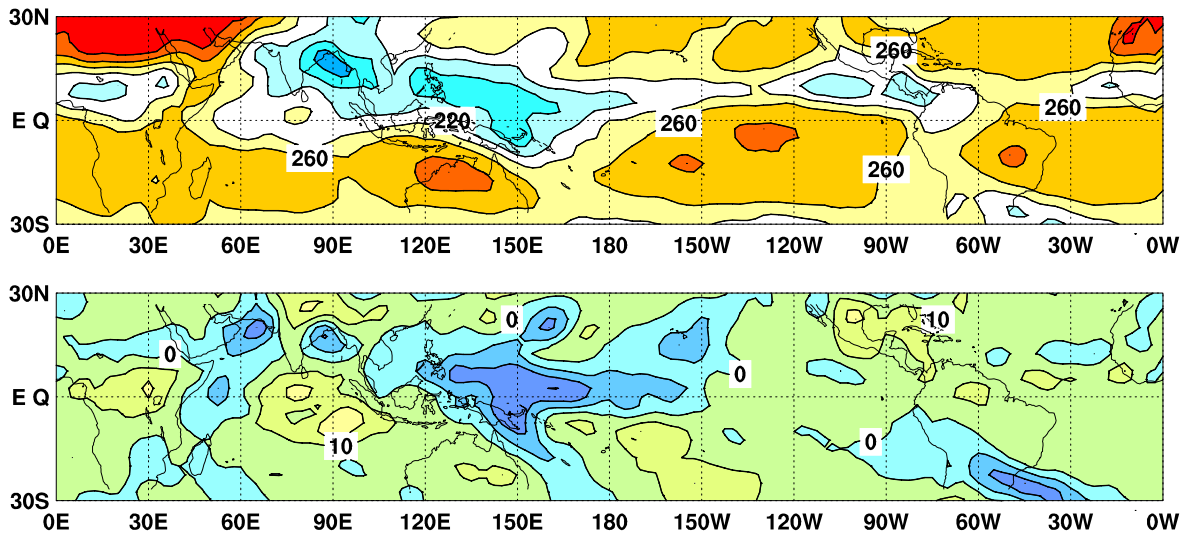


図6 外向き長波放射量 (OLR) (上) 及び年偏差 (下) の分布図 (2009 年 7 月)

OLR の値が小さいほど、対流活動が活発であることを示す。上図は 20W/m<sup>2</sup> 毎、下図は 10W/m<sup>2</sup> 毎に等値線を描いて  
 いる（年偏差は 1979～2004 年の 26 年平均値）。OLR データは米国海洋大気庁 (NOAA) から提供されたものである。

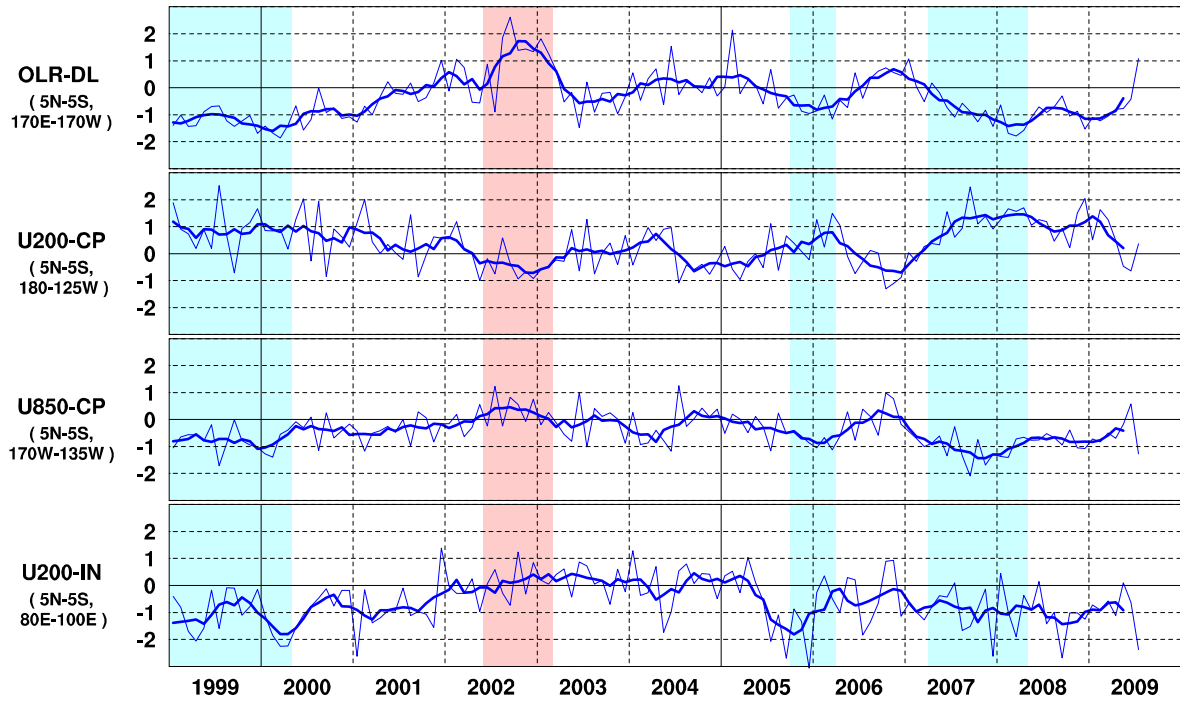


図 7 日付変更線付近の OLR 指数 (OLR-DL)、対流圏上層 (200hPa) の赤道東西風指数 (U200-CP)、対流圏下層 (850hPa) の赤道東西風指数 (U850-CP)、インド洋における対流圏上層 (200hPa) の赤道東西風指数 (U200-IN) の時系列 (上から順に)

折線は月平均値、滑らかな太線は 5 か月移動平均値を示す (年平均値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

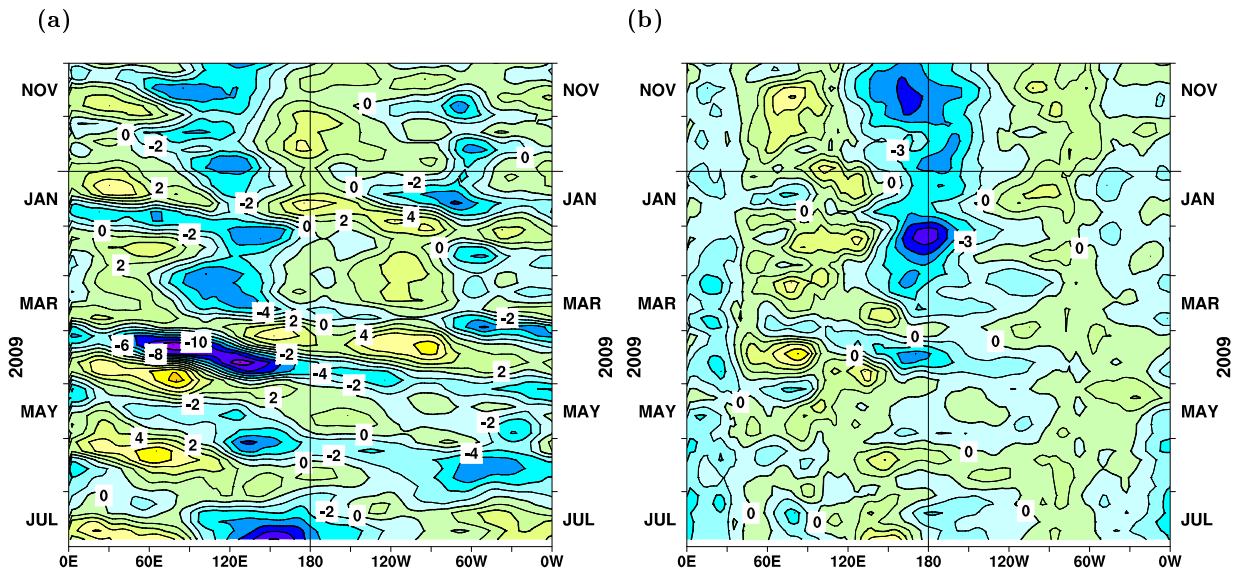


図 8 赤道付近における対流圏上層 (200hPa) の速度ポテンシャルの年平均偏差 (a) 及び対流圏下層 (850hPa) の東西風速の年平均偏差 (b) の経度-時間断面図

等値線の間隔は (a) が  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、(b) が  $1.5 \text{ m/s}$  (両者の年平均値は 1979 年 ~ 2004 年の 26 年平均値)。



## 2009年8月～2010年2月の海面水温予測 (エルニーニョ予測モデルによる)

エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中基準値より高い値で推移

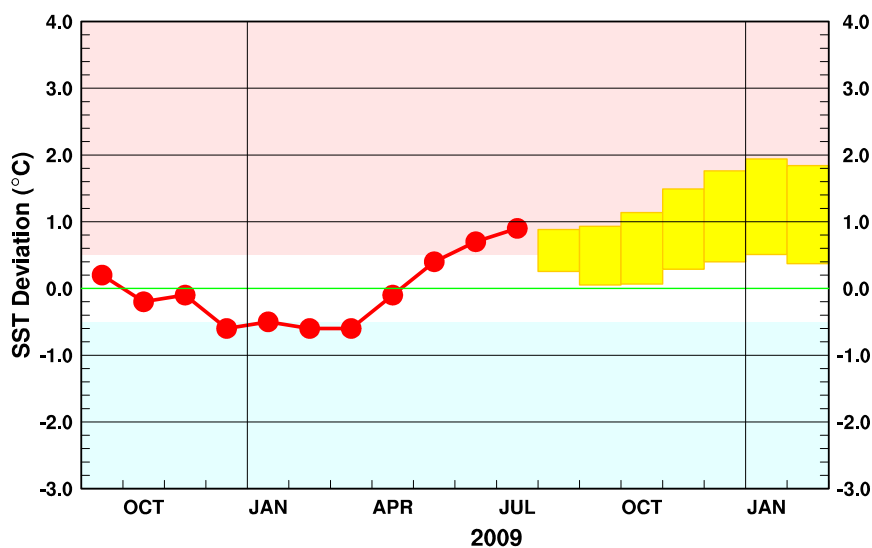


図9 エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の先月までの推移 (折れ線グラフ) とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測 (ボックス)

各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

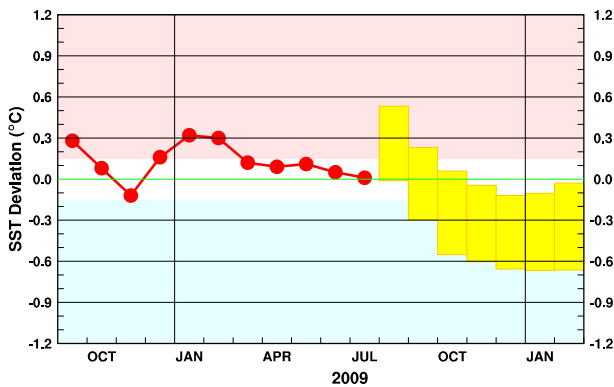


図10 西太平洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの推移 (折れ線グラフ) とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測 (ボックス)

各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

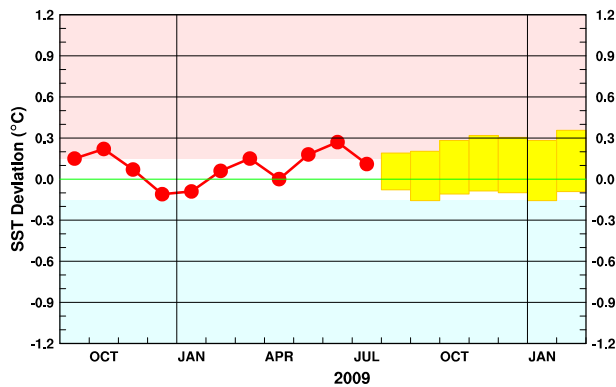


図11 インド洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの推移 (折れ線グラフ) とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測 (ボックス)

各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

エルニーニョ現象などの情報は気象庁ホームページでもご覧になれます。

(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/elnino/index.html>)

来月の発表は、9月10日14時の予定です。  
内容に関する問い合わせ先：気候情報課  
(電話 03-3212-8341 内線 5134、5135)